

孤独の中で敵対する者と主にあって対峙し、主を賛美する

この詩編が十字架につけられたイエスの物語に数多く引用されていることはすでに述べた。この 10 数節もその例に漏れない。しかし、詩編の歌い手そのものは主イエスとは違い、孤独の中で怒りに身を任せ、敵対者を激しく呪詛する。辟易する激しい言葉の連なりである。新約聖書もそれを受け継いでいてユダヤ人への不信の根拠にもなった。「彼らの食卓は自分たちの罾となり、網となるように」

(詩編 69:23-4→ローマ 11:9-10)。「その住いは荒れ果てよ」(詩編 69:26→使徒 1:20)。にもかかわらず、詩人は「(わたしは卑しめられ、苦痛の中にあります。) 神よ、わたしを高く上げ、救ってください。」(30 節) と祈ることができるし、実際、孤独と嘆きの中でそう祈るのである。31 節からはトーンが変わり、彼を囲む「貧しい人」「乏しい人々」「捕らわれ人ら」(33-34 節) に喜び、祝うことを呼びかける。神は全被造物から賛美を受けるにふさわしい方 (35-37 節) である。

1. あなたが撃たれた人 (27 節)

孤独の中で悩む者は神ご自身が自分を「撃たれた」と理解した。参照イザヤ 53:4-5「彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに/わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから/彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり/彼が打ち砕かれたのは/わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」詩編 69:27「あなた(神)に撃たれた人を、彼らはなおも迫害し、あなたに刺し貫かれた人の痛みを話の種にします。」
<27 節> 十字架において身を射しぬかれた?! 30 節「わたしは卑しめられ、苦痛の中にあります。」

2. 彼を囲む「貧しい人」(33 節-34 節)

33 節では「貧しい人」(‘ānāwîm, ‘ānāw 重荷を背負って貧しく、謙虚にされた者、人の弱さに共感する者 **マタイ 11:28 参照**)、「乏しい人々」(‘ebyōwnîm, abāh 貧しく、へりくだる者)、「捕らわれ人ら」(‘āsîrāw) が登場する。彼ら彼女らは「神を求める人々」(33 節) であり、主なる神がその耳を傾けてくださる人々であり、神が決しておろそかにしない人々である。孤独で怒りの激情に身を任せた信仰者は、その経験の中でも神の名を讃美し、歌い、告白し、崇める。それを見て、「貧しい人」、「乏しい人々」、「捕らわれ人ら」は喜び、歌う。孤独と苦しみの中から神賛美が沸き上がり、信仰者たちがそれに合わせて歌う。

3. 全被造物を巻き込んで

「天よ地よ、海も、その中にうごめくものすべてよ、主を讃美せよ」(35 節)。孤独と苦難の中で生きる「主の僕」(II イザヤ参照) に全被造世界の賛美がこだまする! yəhallūhū, Let praise Him!

4. シオンの救い (36 節、37 節)

パレスティナ人や異教徒たちを追いやる「シオニズム」を批判しながら、そして、詩編の祭儀的境界を感じながら、「神は必ずシオンを救い/ユダの町々を再建してくださる。彼らはその地に住み、その地を継ぐ。主の僕らの子孫はそこを嗣業とし/御名を愛する人々はそこに住み着く。」という希望を想起しよう。実際、ユダヤ人は国を失い、流浪、放浪の難民でもあったのだから!

ただし、ユダヤ人に限らず人は成功すると尊大になる危険をいつも覚えておこう。